

令和7年度第1回茅ヶ崎市市民活動推進委員会 会議録

議題	(1) 令和6年度実施市民活動推進補助事業実施報告 (2) 令和6年度実施市民活動推進補助事業の評価について
日時	令和7年5月31日(土) 13時00分から17時52分
場所	市役所本庁舎4階 会議室3～5
出席者氏名	山口敦史 藤間英里 船山福憲 高山和茂 坂田美保子 山田修嗣 事務局6名(市民自治推進課) 廣瀬課長、小松課長補佐、重田副主幹、熊澤主査、佐藤副主査 澤田主事
欠席者	市川歩 菅野敦 山來京生 若林英俊
会議の公開・ 非公開	一部非公開 茅ヶ崎市自治基本条例第14条第3号及び茅ヶ崎市情報公開条例第20条第3号(参考:茅ヶ崎市情報公開条例第5条第3号)の規定により非公開。
傍聴者数	20人(内オンライン7人)

(1) 令和6年度実施市民活動推進補助事業実施報告

○事務局

本日は、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

ただいまより、令和6年度実施市民活動げんき基金補助事業実施報告会を開会させていただきます。

本日司会進行を務めさせていただきます市民自治推進課の小松と申します。よろしくお願いいたします。

まず本委員会の、本日の欠席の御連絡ではございますが、市川委員、菅野委員、若林委員から御欠席の御連絡をいただいております。山來さんにつきましてはまだ御連絡いただけていない状況ではございますが、6名の出席でございますので、審議会規則の委員会開催のための定足数を満たしていることをご報告させていただきます。

それではまず最初に、本日の令和6年度実施市民活動げんき基金補助事業実施報告会の審査を茅ヶ崎市市民活動推進委員会に行っていただくにあたりまして、市長から委員会へ諮問書の手交式を執り行わせていただきます。

市長、山田委員長、前の方によりしくお願いいたします。

(諮問書 手交)

それでは開会にあたりまして、佐藤市長より御挨拶を申し上げます。

○佐藤市長

皆さん、こんにちは。

茅ヶ崎市長の佐藤光でございます。

午前中ちょっと雨が激しかったんですが、何とか雨も上がってくれました。どういった報告会になるのか楽しみにしております。

前回は令和6年ということで、後で気が付いたんですが、この補助事業は平成17年から始まっており、実は昨年で丸20周年でありました。もちろんコロナの時はできない時期もあったにもかかわらず、こうやってまた復活してこの補助事業ができるというのはやはり20年前に立ち上げた先輩たちが市民の力、そして市民活動をしようという人たちをサポートする事業者、市民の方々の長い歴史、20年の歴史があって今日がある。そういったことを私どももしっかりと感じなければいけないと思っております。市民活動の在り方も、20年間の間にいろいろ変わってきたと思います。ですからこれからスタートしていただいた事業もできればずっと継続していただきたい。ただその継続していく中には勇気をもってどこか変えることも大事な努力。守るべきは何を守るのか、そして変わるべきは何を変えなきゃいけないのかということを考えることが長く続けられるのではないかと考えております。そう

いった意味では、この報告会というのは報告をするだけではなくて自分自身の振り返りにも繋がっていくでしょうし、また未来に向かって皆様の市民活動が繋がっていく。そんな風に私は信じております。

令和7年度に向けて、皆様の報告が次の市民活動に繋がっていく。そういった報告会になることを御祈念申し上げまして御挨拶と代えさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局

ありがとうございました。

続きまして、市民活動推進委員会の山田委員長より、御挨拶と各委員の御紹介をお願いいたします。

○山田委員長

こんにちは、山田と申します。

今日はお集りいただきましてありがとうございます。それからWEBでも配信されているということですので、様々な参加者の方を交えてこの会が開かれるということでございます。半日の時間ではありますけれども、よろしくお願いいたします。

今日は雨の話ばかりで恐縮ですが、雨で思い出したことがあります。結婚式ではよくプロの司会者が司会をすることがあります。もちろん、友達が司会をすることもあります。

ある時にプロの司会者が司会をしている雨の披露宴で、冒頭に何と言うかと思い、その司会のコメントをわくわくしながら聞いていましたら「恵みの雨」「雨降って地固まる」という切り出しで司会をしていました。今日は報告会ということなので、どんなふう to この中で皆さんの話が「恵みの雨」のように他の団体の方に浸透するのか、それから皆さんの活動やパートナーシップも含めた茅ヶ崎のこうした温かく楽しい活動の広がりがどのように大地をしっかりと強固なものにして、市民活動が市を支えていくのかといったところが非常に期待できるのではないかなと思っています。そういう意味で改めて、わくわくして今日は市役所にやって参りました。他の委員も同じように期待をして、聞かせていただきたいと思っております。皆様の一年間の活動を、限られた時間ではありますけれども様々な角度から御報告いただければ幸いです。

この市民活動げんき基金の補助事業は、先ほど市長からもお話がありました通り、平成17年度にスタートしており、すでに196事業という、200件近い補助事業が実績としてあり、展開されてきたということです。

今日はそのうちの6団体ということですので、この他に190の事業が既に実施されているということです。そういった意味では、縦の繋がりもとても重要です。さらに、今日の6団体様の横の繋がりも、こうした報告会の中でさらに繋げて広げていただければと思っております。私たちも実績の報告書を事前に拝見いたしました。すでにその時点で面白い素敵

報告が沢山記載されていまして。その内容を生で聞かせていただくのを楽しみにしております。委員からは、それに対して質問やコメントをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、これから報告を聞かせていただきます委員を御紹介いたします。

(各委員紹介)

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○事務局

山田委員長、ありがとうございました。

佐藤市長は、次の公務のため、これもちまして退席とさせていただきます。御了解のほどよろしくお願いいたします。

それでは本日の報告会の流れについて簡単に御報告、御説明を申し上げます。

先ほど山田委員長の方からお話がありましたが、本報告会ではZOOMのウェビナー機能を使用して映像を配信しております。御承知おきください。また、本日これから14時30分ごろまでの時間で令和6年度に実施した市民活動げんき基金補助事業のスタート支援の枠について御報告をいただく予定です。スタートの発表の時間配分についてですが、最初に報告団体より7分以内で御説明をしていただきます。時間管理について申し上げますと、まず終了1分前に一度ベルを鳴らします。予定時間の7分を経過したところで二度ベルを鳴らします。説明が終わりましたら、市民活動推進委員からの質問やアドバイスをを行います。これらは8分以内を予定しております。説明中に二度ベルが鳴りましたら途中であっても速やかに説明を終了していただけたらと思います。

また、思いのこもった事業を短い時間でアピールすることは大変なことだとは思いますが、円滑な進行に御協力いただきますようお願いいたします。

また、質疑応答の途中でベルが鳴りましたら、その質疑を最後の質疑とさせていただいております。質問される委員、また回答される団体の皆様には、一問ずつできるだけ簡潔なやりとりをお願いしております。よろしくお願いいたします。

なお、本日の報告会の様子を写真撮影し、市ホームページや広報紙で公表をする予定となっております。写真撮影に支障がある方はお近くのスタッフまでお申し出ください。

最後になりますが、この補助金は市民活動げんき基金を原資とする補助金でございます。冊子5ページにおいて、御寄附いただいた方々を掲載しております。皆様の御寄附がなければこの補助金はいずれなくなってしまうと思います。会場内に募金箱を設置させていただきますので、どうぞ制度の趣旨を御理解いただき御協力いただければと思います。

それでは、ただいまより各事業の報告を開始いたします。NPO法人ASOVIVART、事業名「アートの力で“まち”を元気に！ASOVIVART（アソビバート）」の報告を

していただきます。

御準備よろしく申し上げます。

なお、本団体の評価につきましては、山口委員が直接の利害関係があることから評価には参加いたしません。あらかじめ御承知おきください。

それでは、よろしく願いいたします。

○NPO法人ASOVIVART

(NPO法人ASOVIVART発表)

○事務局

それでは質疑応答に移ります。

山田委員長、よろしく願いいたします。

○山田委員長

それでは、委員からの質問コメント等がありましたら、どうぞ御発言いただければと思います。

では私から。こういう素敵な素晴らしい活動をしてくださったということについては率直にいい活動だなと感じました。御来場の方もいらっしゃったというのは大変喜ばしく、活動なさった方も高揚感があったのではないかと思います。おそらく、昨年3月、企画の時にも伺ったと思うのですが、カタカナ語でいうインクルーシブという言葉がきちんと定着し、多くの方に理解をされていくということが必要だということも改めて伺いました。これについて、こういうふうにできてよかった、さらにこういう難しさを感じたなどの主催される側の感想や思いなどありましたらもう少しお聞かせください。

○NPO法人ASOVIVART

先ほどは説明がとても矢継ぎ早になってしまったのでお話しさせていただいて嬉しいです。

インクルーシブについて私たちが考えているのは、まさにその難しさについてです。やはりインクルーシブのイベント、福祉のイベントという福祉に関係している方と、普通のイベントに出店する方というのが分けられてしまうのが現状なんですね。ASOVIVARTのイベントでも例えば「コマ大会」をやってみようとする、そこに障害のある方がいっぱい来るってことはまずないんですね。では、インクルーシブのイベントをやってみようという、一般の方たちが結構来にくくなったりすることが多いんですね。私はこのインクルーシブという言葉が一つの壁になっているのを感じています。でも、そのインクルーシブという言葉自体はまず理解を伝えていくために必要なものだと思うんですね。

障害があるとかないとか、年齢が違うとか国籍が違うとかいうのは、お互いを知るきっかけがないからだと思っているんです。私たちは自然な形でのイベント、楽しいことだったり、アートや遊びという楽しいことの中でそのきっかけが自然と生まれることというのをいつも探しています。このビオロボットはまさにそうなんですが、これを作ろうとしたきっかけも例えば目が見えない方がさわることでお魚の形が分かる。そしてちょっと生き物が怖い方、そんな方も動きを柔らかくしてあげることで抱っこしたりして生き物に興味を持つことができる。多様な形でものを見る方たちが何か一つのきっかけでお互いを知ることが生まれるんじゃないかと考えています。

今度の6月にプレオープンする「ことばの森」という場所なんですけど、こちらの場所はこのイベントがきっかけで活動をすることを決めました。「ことばの森」と書いておりますので本をきっかけにしたイベントになります。こちらの内容は、大人が子どもに読んで欲しい本というのを全国から募ります。例えばお魚屋さんがお魚屋さんになろうと思った本、例えば少し障害があって子育てに悩んでいる方が読んで元気になった本。様々なシーンの方が勧める本がそこにあることによってその本をきっかけにその方と繋がるのが生まれ、そしてそこで子どもたち、そこで知り合った大人たちが、そこに何か希望やきっかけを見出すことになるのではないかと考えています。ただ本を読む場所だけではなく、これまで活動してきた遊びやアートのように様々なワークショップだったりを開催し、地域の大人が講師としてお話をしていただけるようなことも開催したいと思っています。

そのインクルーシブのことについて最後に一言お伝えさせていただきたいなと思っているのが、茅ヶ崎には様々なすごく素敵な団体があると思うんです。その様々な団体の方がお互いのことを知るきっかけだったり、繋がるきっかけを皆さんが活動していると思うんですけれども、その方々がお互いに知り合うためには何か共有できるような一つの言葉だったり何かが必要なのかなと思っています。例えば、そのインクルーシブという言葉だけではなく、茅ヶ崎では例えば「ありがとう」を言い合おうでも「こんにちは」って言い合おうでも、何かすべてのところに共通するような、インクルーシブという活動に興味を持つことを発信できないかなというのを、今、模索しているところです。その中で、この「ことばの森」というものが本をきっかけに繋がることのできるのではないかと考えている次第です。

すみません。大分話してしまいました。

○山田委員長

では続いて、委員から質問、コメントいかがでしょうか。

○藤間委員

素敵なプレゼンありがとうございました。

ハマミーナのブランチさんのところに写真が飾ってあって、とても楽しいイベントだったようで次があれば参加したいと思いながら見ておりました。

この「ことばの森」について伺いたいんですが、私は今児童館に勤めております。親御さんや子ども向けの絵本とか沢山あるのですが、今子どもたち、お母さん方の本離れがすごくて、読んで欲しい本が子育て本とか啓発本とかたくさんあるのですがほこりをかぶったような状態になってしまっています。何かこちらで「本を見ようよ」と促すようなイベントなど考慮されているのか思案されている段階があるのか、児童館で本を勧めるためにも伺いたくて、ぜひお聞かせください。

○NPO法人ASOVIVART

私たちもそれを感じていて、この活動をしようと思っています。

まず、本というのは背表紙から見ることになると思うんですね。遊びも何もそうなんですけど、まずは手に取ってみないと楽しさって始まらないと思うんです。そのために手に取ってもらう仕掛けというのを私たちは作ることにしました。空間の中にこのビオロボットで製作したように実際ASOVIVARTの工房の室内をすべて森のような形で作りました。かなり小さくて見えにくいんですけど、この設計図のような形で室内を木のような、木に本が実るというような形で沢山の方が展示されているんですね。それはその本の背表紙だったり、中を開くとその本を寄附してくださった方のメッセージが書いてある状態になります。

ビレッジヴァンガードという人気のある本屋さんがあるんですが、そこの本屋さんは一言ずつ店員さんたちが書いた本のお勧めのワードが書いてあるんですね。

例えば、「ケーキ屋さんの私がケーキを作りたくなかった一冊」とか書いてあるとか、「子どもがどうしても眠らない時にこの本を読むと爆睡しちゃった一冊」とか書いてあると、もしかしたらそのワードが引っかかって、気になると思い手に取る方っていうのはきっといると思うんですね。

ここに来る子どもたちというのは放課後のアフタースクールの時間帯で開催する予定です。3時から5時くらいですね、この時間帯の中で子どもたちが遊びに来てその中で本について一緒にしゃべるにぎやかな図書館のようなものが開催出来たらなと思っています。

イベントも開催しますので、よろしくお願いします。

○山田委員長

今のベルが鳴って終わりの時間だそうですので、質疑応答は以上とさせていただきます。委員ももしかしたらまだお話したいことがあったかもしれません。後ほど、総括質疑等で話ができればと思います。

ありがとうございました。

○事務局

それでは続きまして、わわわのわさん、御準備をお願いします。

事業名は「～子どもの遊びと学びにやさしい茅ヶ崎を～大人も子どもも豊かに育つまちづ

くり★茅ヶ崎アソナプロジェクト★」です。

○わわわのわ

(わわわのわ発表)

○事務局

ありがとうございました。

それでは質疑応答に移ります。

山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

では委員からの質問コメントがありましたら、どうぞお尋ねください。

いかがでしょうか。

○坂田委員

発表ありがとうございました。

プレゼンの時からとても私は楽しみにしていた団体さんでいらっしゃるんですけど、今の発表を伺いまして、想像していなかった素晴らしい成果がたくさん得られたのではないかと実感をいたしました。

例えば先ほどの高校生のことですか、あるいはメンバーですね、運営に関わるメンバーが9人から18人に増えたとか、やはりこの場の持つ魅力というのを皆さんに知っていただけたことが出来たのかなということで大変うれしく思いました。また、「ゆめパのじかん」もですね、本当に素晴らしい映画で皆さんに知っていただくことができたということも一つ裏付けになったのではないかと感じます。せっかくなので、この場を作るまでの御苦労がどんなところがあったかを伺いたいのですがよろしいでしょうか。

○わわわのわ

運営のメンバーのうち、ひろばについていうと大体8人が子育て中の、時間带的に平日日中なので子育てをしているお母さんたちがメインのメンバーになっています。それに少し時間のある60代70代のおじいちゃんたちが何人かという感じで手伝いに来てくれています。

やはり自分たちの子育てと一緒に、場をやっていくというと集まらない日もあったりとか体調不良とかで、あとはなかなか時間に集まるというのが難しくて普段みんなで遊ぶだけなら何となく集まればいいけれども、やはり広報をして場を開けるというところは、私たちも今までにただ集まっていた時とは違って、この時間にこの状態でみんなが来た時に安心でき

るように開かなきゃいけないということが一年経ってやっと少し板についてきたところはあるかなと思っています。

「ゆめパのじかん」に関しては、広報がチラシを 1500 部刷ってお知らせしたんですけど、最初なかなか人が集まらなくて、皆さんぎりぎりに予定が定まってから、ぱっと申し込まれるので人がちゃんと集まるのかと。「わわわひろば」は日常の場なので、何となく見通しを立てながら進んで行けるんですけれども、「ゆめパのじかん」は私たちも慣れない場ではあったので、そういう場をやり遂げるっていうのは、やはり大変だったなと思います。でもその映画をみんなで観たことや、「わわわひろば」という日常の場にまたこういう人たちに来てほしいねとか、そこから来てくれる人も増えてきたのでそこは繋がっているし、両方、来年度も同じようにひろばは週 1 回、イベントも一応 3 回ぐらい予定していて、出来る限り実施していきたいと最終的にはモチベーションに繋がっています。

あとは、事務作業が多くてパソコンに向かえるメンバーが 2, 3 人なんです。そのところでやれるメンバーを増やすのか、今いるメンバーでいろんな研修に出たりしてやれるようになるのか。広報とか事務局的な業務が増えてきていてどうしたらいいのかなというところでもあります。

○坂田委員

ありがとうございます。

団体の皆さんが段々と成長していくさまが見えてうれしく思います。たくさんの人に来てもらうことの責任を改めて感じることもなったのだらうと思いますし、回数が増えるほど事務作業が増えてくるので、今後の団体の方向性として基盤を整備しながら、場を作っていくと更に素晴らしい活動になるように思います。

○山田委員長

続いていかがでしょうか。

○山口委員

非常にすごい活動で、私がびっくりしたのは開催数 4 5 回ってところで年間 5 3 週か 5 2 週のうち 8 週しか休んでいないというところが、すごいと思いました。今年もこれは続けられているのでしょうか。あと、今年はまだステップアップの基金は申し込まれてないと思いますが、その辺続ける上で、今年困っているというかそういうこともありましたらお聞かせください。

○わわわのわ

先ほど資金面で話せばよかったと今思っていたので聞いていただいて良かったです。

今年、私たちもステップアップに進むことを前提に、昨年度げんき基金に手を挙げていま

す。なのですが、今年は実はステップアップには進んでいません。

それには、「わわわひろば」を続けていく上で、資金をどうやって回していくかということが私たちの中で場をちゃんとやっていきたいからこそ、やはり回るお金が必要だねというところに今至ってまして。この2024年の一年目に関してどのように資金をやっていたかという、こちらのげんき基金ともう一つ民間の助成金をいただいて、物品を買ったりしてスタッフは基本ボランティアでずっと一年間やってきたというのが一年目です。二年目、基本的に来る人からお金をくださいというふうに参加費の設定はしていません。受付を置いてまして、お気持ちをお願いしますという形なんですけど、なかなか集まらないというのが現状だというのが今年一年やっての私たちの感想です。今はまだそれで続いているんですけど、6月から7月から運営協力金というものを、参加してくれた大人の方から一回200円集めるというのを、一つ変化として今年やります。あとは今回げんき基金のステップアップにできなかった理由はですね、国から子どもの居場所に対して、昨年度50万円が出る別の助成金のことを別の方から聞きまして、それは人件費にお金を回すことができるということで金額的にも内容的にも私たちが今、この場をコンスタントに開け続けるために必要なお金というのは人件費に少しでも回していけるというところが一つ大事な要素かなということで。げんき基金の昨年の担当の方にもいろいろ相談をしてこども政策課の方にもちょっとご相談をして今年はそちらを、まだ実は募集要項が出てないので申し込みができてないんですけど、市の中で二つは申請できないということらしいので今年はそちらで進んでいこうというのが現状です。

○山口委員

ありがとうございます。

今年も、何十回かわからないですけど、頑張ってください。

○わわわのわ

はい、コンスタントにやることの楽しさもあって、畑だったら一週間に一回ぐらい行かないと楽しさはわからないです。四十何回やれるかなと思ったのですがやれたので、今年も無理のないペースで、雨でも傘さして、カップ着て、子どもたちと遊びたいと思います。

○事務局

はい、ありがとうございました。

続きまして、にじカフェさん御準備の方、よろしくお願いいたします。

事業名は「414（よいし）」カードを通して死生観について対話する会」です。

○にじカフェ

(にじカフェ発表)

○事務局

ありがとうございました。

それでは質疑応答に移ります。

山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

では委員からの質問コメントがありましたら、どうぞお願いします。

○藤間委員

どうもありがとうございます。

私の妹が病気なのでどんなふうにされているのかと常に気にかけていました。

私は今、高齢者リーダーで高齢者体操に参加したりしてるんですが、先ほどおっしゃったように男性の参加者がとても少なく全体の2割程度しかいらっしやなくて。男性って死ぬこととか怖くないのかな、体の心配とかしないのかなと思って心配しているんですが、男性がどうして参加されないのか、考えられてることがあったり、何かアプローチをかけてらっしゃることがあればお聞かせいただけると嬉しいです。よろしくお願いします。

○にじカフェ

ありがとうございます。

これは勝手な思いなんですけど、男性って弱音を吐くことが苦手な人たちと私は思っていて、井戸端会議みたいなのが得意じゃないというか女性もそんなことないのかもしれないですけど。女性と男性とそういう分け方もよくないかもしれないけど、大きく分けると女性は知らない人とも井戸端会議ができるけど、男性はやりにくいのかなと思っていて。他の認知症のサポーターの方の会議でもやはり男性の参加者は少ないという話題が出て、お酒があったほうがいいんじゃないかという話はあったんですね。お酒があると参加しやすいのではないかと。ただ、まだうちはお酒が出せるお店ではないので、今実際に午後の時間帯にその場にいて人と、わっとカードを広げて「どれが気になる？」とプチ対話会みたいなのはやっているんですね。男性のお客様も最近は少しずついらっしやるので、いらっしやる時にはちょっとお誘いして一緒にやったりはしています。ただ、もっとどんどん参加して欲しいなと思っていて、反対に男性の皆さんにどうアプローチしたらいいのか教えていただけたらうれしいぐらいです。ぜひ、お願いします。

○山田委員長

リクエストがありましたので男性の委員でどなたかいらっしやいますか。

○高山委員

私が感じたところは、男性がそういう場に接触しやすい自由になる時間帯と女性の自由になる時間帯というのはすごくずれが大きいのかなと感じました。

私がこの会の中で一番お聞きしたいことが一つあったので、この場をお借りしたいんですが、運営そのもののなかで皆さんが楽しみになさるお食事はちょうどとんとんの数字になっていると。ところが、運営費の中でスタッフさんの講師にかかる費用が非常に大きい。これは継続していくためには、そこを何とかしていかないとこの会の運営が、リーズナブルに運営できていくポイントにならないのではないかなと。正直、こんな質問をしていいのかなと思いました。率直に聞かせていただければと思います。

○にじカフェ

そうなんです。

講師をお呼びするのが大変だったので、無料でいいよと言ってくださるんですが、遠方から来てくださるのでそういう訳にもいかず、助成金をお願いしたというのが正直なところなんです。なので、来年からはお呼びしなくても自分たちで同じような温かい空気感で運営できるように努力しなければいけないんですけれど。

一つ大きな違いがあって、先生方は実際に患者さんや患者さんの御家族と話ながらその言葉を作ったり、絵を決めたり、色を決めたりってことをされていたんです。私たちはそれをツールとして使うだけなのでそのエピソードがないんです。本当に心を打たれるのはそのエピソードが、すごく心を打たれるところだったので、来年から開催するときにその点はどうしようかと思っていて、ちょうど今年6月と10月にまた助成していただいて開催しますので、何とかそのスキルをちょっと盗もうと思っています。

あともう一つの問題点は、私たちににじカフェは、実際に死を近くに感じている方々とあんまりできてないというのが事実なんです。乳がんの方々の団体が出入りしてくださっているんで、乳がん罹患している方はいらっしゃるんですが、一緒にやろうというところとちょっと怖いとおっしゃってなかなか参加されないのが現状です。なので、今、元気な私たちがやっているという状況なので、本当の意味では死が間近にある方にこそ、今の自分の人生を大切にしていきたいという思いでやっていきたいのでその空気感を作るというのが実際にこれからの課題かなと思っています。

ただ、やはり講師料はなかなか支払えないので何とか自分たちで努力して頑張りたいと思っています。

○山田委員長

続いていかがでしょうか。

では私からも一つ伺います。今回の活動を冷静に振り返って御自身のこと、それから団体

のことを評価なさっているところは、とても重要な発見がたくさんあったのではないかなと思います。そのうえで、今難しいというところを中心に課題をあげてくださいました。次に繋がるよかったことについては、これを冷静な評価の中からどんなふうにお感じになったでしょうか。

○にじカフェ

本当に、死に関して話すことがタブーではないんだというのが、にじカフェの中では結構常連の皆さんたちの中では、わかってきてくださっていて、もし自分にご飯が食べれなくなったらそっとしといてね、とかそういう会話が日常で聞けるようになってきたのはとてもいいことかなと思っています。ただやはりツールがあったほうが、より話が広がっていくのでもっと簡単にカードが広げられるようにもったならいいなと思っています。

○山田委員長

では時間ですね。

ありがとうございました。

○事務局

それでは続きまして、特定非営利活動法人まるほ横丁さん、御準備をお願いします。

事業名は「まるほ横丁に大集合～いっぱい食べて、いっぱい遊ぼう～」です。

○特定非営利活動法人まるほ横丁

(特定非営利活動法人まるほ横丁発表)

○事務局

ありがとうございました。

それでは質疑応答に移ります。

山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

では、委員からの質問コメントがありましたらお願いします。

いかがでしょうか。

○坂田委員

発表ありがとうございました。

今日の発表を聞いてあの方はどうなったのかなと思ったら、全部今お話しいただいたので、

聞くことはなくなってしまったと感じました。参加者がレギュラー化というのは、ここに毎回参加してくださっている障害の皆さんとか小学生の皆さんとか固定になっているんですね。そこも今後の課題なのかなと感じましたし、それから何といてもピザ窯に亀裂が入ってしまったというのは、これは本当に残念だなと思ってしまったのですが、この一年の活動の中でいろいろなことを気づかれたと思います。法人格を取得して、いよいよこれから、というところですが、今後の展望について伺えたらと思います。

○特定非営利活動法人まるほ横丁

ありがとうございます。

今後の展望として本当に今模索中というのが正直なところなんですけど、理事長がまるほ農園という藤沢の瀬郷で農家をやっているものでして、そちらの畑で落花生掘りの体験をさせていただきました。子どもたちも障害のある方も、わかりやすい作業で、お持ち帰りもありというところでかなり高評価を得ることができました。左から2番目の写真になります。あれはうちの子でうちの子が持っているのが落花生になります。それは、活動的にわかりやすかったので、今後それだけに限らないですが、農業との連携というのも面白いのかなと考えています。

○坂田委員

ありがとうございます。

ぜひこの農園を活用していただきながら、藤沢の方でもユニバーサル農園、光友会さんがやっていらっしゃるのでそういったところも少し参考にさせていただけるといいのかなと思います。

○山田委員長

他にはいかがでしょうか。どうぞお願いします。

○高山委員

休日の居場所づくりというのは、それを支えるスタッフの方は大変だろうなと思います。障害児の方たちは御両親も含めて、普段の生活で時間を作って、こういうコミュニケーションの場を作るというのがすごく大変だと思うので、年1・2回ぐらいはイベントを作れても、これだけの回数は皆さんが活動することによって初めてできることだと思います。親御さんたちも時間が作れずイベントが減ってしまうところを上手にフォローできているのは素晴らしいことだと思うので、障害者の方たちの御父兄も含め、どうやったら一緒に活動できるかをよく話し合ってくださいと、皆さんが和気あいあいと楽しめる場になるのではないかと思います。そのあたりをこれからどのように作っていくのか、お考えがあったらぜひお聞かせください。

○特定非営利活動法人まるほ横丁

ありがとうございます。

私自身は、特別支援学校で進路担当という仕事をしております、やはり卒業後の余暇のあたりであったりとか、暮らしのところであったりとかの保護者の方からの不安な言葉をすごく耳にしています。アフターフォローという形で今年も3月に卒業した生徒を先週も見に行って来たんですが、ちょっと運動不足で明らかにこの2か月で5キロは太っただろうというような生徒がレアケースではなくて、よくあるケースなんです。なので、先ほどの御質問でもありましたが農作業というところに限らず、体を動かす運動、ボール遊びとか、ちょっとみんなで歩こうよ、だけでも本当に充実した余暇になり得るのかなと考えているので、もうちょっと肩ひじ張らず気楽に集まったりできるような場をみんなで作り出していったらいいのかなと、ちょっと質問とずれてしまうんですが考えています。

○船山委員

発表ありがとうございます。

猛暑対策は何かお考えになっていらっしゃるのでしょうか。

○特定非営利活動法人まるほ横丁

全くです。なので、7月は海だったら少しでも、中に入って涼しくなったりだとか、茅ヶ崎だと海の家が、屋根がたくさんあるのでそういった活動の場所、日陰だと直射日光は避けられるのでそういった活動の場所、野外以外のところでも考えていきたいなと考えています。また、里山公園のキッチンでパン作りなんかも夏はいいのかなと思ったりしています。

○船山委員

ありがとうございます。

○山田委員長

短いコメント一つなら大丈夫そうですが。いかがでしょう。

では私から。今回、この「食べる」を中心としたことで五感をうまく表現する事になったと思います。その時、こんな風に説明したらうまくいったよというエピソードは何かありますか。感覚的なものを言葉にするのは結構難しいと思うんですが、「食べる」「おいしい」というその良さをどんなふうに伝えるとうまく伝わるか、そんな実感があれば教えてください。

○特定非営利活動法人まるほ横丁

伝えるというよりも、ピザの生地を持って触った瞬間に顔がほわーんと柔らかくなったりだとか、気持ちいいっていうふうになるところが言葉を伝えずとも伝わったのがこのピザ

作りの感覚だとすごく感じています。その中で、自分だけのピザが出来上がって焼き上がると絶対に美味しくなるので、そこで美味しく食べて、普段自信がない方もたくさんいらっしゃるんですけど、自分が作ったピザがこんなに美味しくできたので、「これ、僕の食べてよ。」「私のもちっと一口味見してみて」と表情がすごく良くなっていっているのは、すごく感じる場所だったので、その点はピザというところではよかったのかなと感じています。

○山田委員長

写真などが許されれば、可能な限りそういった視覚情報も含めて、伝えていくということですね。そして、反省のところに「情報発信やより多くの方の参加へ向けての難しさ」と記載があったので、多分そういうところがこれからのヒントになっていくということですね。

では時間ですので、一応締めさせていただきます。

どうもありがとうございました。

○事務局

それでは、ここでスタートの部が終了いたします。

概ね10分間の休憩を取らせていただきたいと思いますので、こちらの時計で2時半から再度スタートさせていただきます。

では、休憩に入りたいと思います。

(休憩)

○事務局

では続きまして、ステップアップ枠の発表に移らせていただきたいと思います。

ステップアップ枠につきまして、当団体の報告時間として10分以内でお願いします。こちらでも終了1分前に一度ベルを鳴らさせていただきます。10分が経過したところで二度ベルを鳴らさせていただきます。説明が終わりましたら、質疑応答に入らせていただきます。概ねこちらは10分以内を予定しております。

それでは、特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオンさんで「夏休み子供向けSUP体験会 2024」よろしくお願いいたします。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン

(特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン発表)

○事務局

ありがとうございました。

それでは質疑応答に移ります。

山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

では、委員からの質問コメントがありましたらお願いします。

○山口委員

発表ありがとうございます。

ステップアップももう3回目ということで、今回で終わりということで来年度以降のところにも書いてあると思います。スタート支援から合計4回で、団体としてステップアップできたというか、こういうところが市民にとって非常に有意義な活動になったという発展の要素というか自分たちで感じてるところがあれば教えていただきたいと思います。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン

実際このイベントをすることでSUP自体を真剣にやろうというふうに思ってくださるお子さんがいたりしています。具体的に言うと、SUPは海で漕いで前へと進むスポーツなんですけどそれでレースをしたり、波乗りもしたりということが出来るんですが、そういった大会が、去年も行ったんですけど「SUPジャパンカップ」という我々の別のイベントごとなんですけど、そういった大会に参加してくださったりとか、この団体の母体がSUPのショップなんですけど、そこへいわゆるステップアップのためにもっとSUPの漕ぎ方を習いたい。そういったお子さんが増えたりしてSUP自体の普及やそのお子さんが海で遊ぶアクティビティとして選んでくれるようになってることがすごく我々としては成果かなと思っています。

○山口委員

ありがとうございます。

○坂田委員

発表ありがとうございました。

私も三年間、貴法人の活動を拝見させていただいて年々しっかりと課題と反省を団体内部で分析され、また改善をされ、次の活動にというふうにステップアップしている様子がすごく実感として伝わって参りました。今後についてですが、これから継続していく中でやはりインストラクターですね、講師の謝金ネックになると思うんですが、団体で何か検討しているようなことがあるのかをお伺いしたいです。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン

今回の助成金を受けて、今映している左側にいるのは私なんですけど着てるTシャツだとか、そういった部分も助成をいただいたり、そういう体験会のパッケージ的な部分は大体決まったかなと。それで実は今年は「子どもゆめ基金」の方で一部助成を受けようとしています。実際、この活動を通して根本は茅ヶ崎市の子どもたちにこのアクティビティを体験してもらって、継続して楽しんで欲しいというところが僕らの目指すところなので、その継続していくという部分で、例えばこの子どもたちがインストラクターとして活動してくれたりとか、あとは親御さんも実は裏で自分も体験したりとかいったところもあったりして、そういったところの繋がりで資金面も工面できたらなとちょっと考えています。実際、今回の会計の中にもありますが我々の方で助成金以外の部分で団体として出している部分に関してはその部分が結構多くて、そういった形でみんなが継続して楽しんでくれる、プラスへと我々も活動しやすくできるような形で進んでいけたらなと思っています。

○坂田委員

ありがとうございます。

茅ヶ崎市さんは、道の駅7月オープンですね。そういったところもあるので、例えば着地型観光というような形の体験会メニューを作ったりすると、例えば三千円ぐらいでも参加する方がいらっしやると思います。茅ヶ崎の魅力アップというところに繋げていくと単価がアップしても大人の方の参加も見込まれるのではないかと、と思いますし、私も楽しみにしています。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン

ちなみにですけど道の駅さんでは、実際サーフィンの展示があると伺っていて、観光協会さん経由でSUPも展示してくれないかと、今、申し入れをしているところです。

○山田委員長

私から伺います。山口さんの質問に少し関連付けて、かなり近いところなのですが、この活動を市民活動として改めて総括なさるときに、例えば前々から提唱されている茅ヶ崎らしい海との関わり方とか、市民感覚における海の再評価みたいなのが、経験的にも実感的にも資料として、声としても集まったと思います。これをもしも、皆さんが伝えながらさらに市民レベルでのところに繋げていくとしたら、今回の単年度、それから数回の活動を含めて、市民としての海というこの感覚について、特に感じたところとか、強く主張していきたいところがあれば教えていただければと思います。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン

この活動は結構皆さんに知っていただいて、来月6月15日に高砂コミセンで安全講習をさせていただくんですが、実はそういう活動の繋がりから、まちぢからさんとの繋がりだと

か生まれてきて、SUPをやりたい方はたくさんいるんですけど、安全講習から入ってSUPで楽しんでみない？みたいな提案もしていこうかなと思っています。

今、南地区のまちぢからさんとそういうお話をさせていただいているんですが、海岸地区の方にも提案させていただきながら海の危険・安全というのは茅ヶ崎ならではの、いろんな世界とか植生とかそういう部分も踏まえて、説明して子どもに知ってもらいながらSUPで遊んでみない？みたいな形で茅ヶ崎の海が子どもたちに根付いてもらえればなど、これから活動していきたいなと思っています。

○山田委員長

短めにあと一つくらいはまだ大丈夫ですが。

では続いてすみません。

そうしますと、市民活動とSUP、市民活動と海の安全の話は大変よくわかったのもう少しだけ理念的に広げてみます。皆さんの実感からすると、市民にとっての海というのは、今回のことを踏まえてどのようにまとめられそうですか。改めて身近な感覚として海を紹介することによって、茅ヶ崎市民の海感覚はどのようなものだとお感じですか。印象の部分になりますので教えてくださいませんか。

○特定非営利活動法人SUPUスタンドアップパドルユニオン

意外に海を利用している方が多かったなあと。安全の話をして、例えば海のアクティビティだけでなく、サッカーの練習に来たり、テニスとか野球とかをする方々が結構海に遊びに来てるんだなというのがよくわかりました。それで、これからはSUPは我々の事業の一つですが、そのSUPプラス違うアクティビティとの組み合わせで、海に来て遊んでもらうということの大きな大義でもうちょっと活動できたらなと思っています。

○山田委員長

時間のようですので、以上とさせていただきます。

○事務局

それでは続きまして、一般社団法人リトルハブホームさんで「ボランティア養成講座 HPの作成」になります。ご準備の方、よろしくお願いいたします。

○一般社団法人リトルハブホーム

(一般社団法人リトルハブホーム発表)

○事務局

ありがとうございました。
それでは質疑応答に移ります。
山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

では、委員からの質問コメントがありましたらお願いします。
いかがでしょうか。

では私から伺います。今もお話の途中でWEBなどの情報が、広くボランティアの参加ですとか関心の喚起というところに繋がりました、ということでした。これは目標に叶う非常に素晴らしい事例だと思いました。今回そのWEB制作を通じて、同様に多くの方々がきっかけづくりに繋がったと思います。そういう実際面での成果や効果を、ここでもう少しご紹介いただけますか。

○一般社団法人リトルハブホーム

ありがとうございます。

このWEBについてですが、4月から市川さんとグリーンズという社会問題のWEB記事の事務局長と、毎月どうしようかと作っていった中で、オープンの時期がちょっと遅くなってしまって3月、今オープン出来たんですがこれから広めていきたいというところではあって、今回わわわさんも、にじカフェさんも掲載させていただいたんですが、茅ヶ崎のまちの活動されている方々は思いがあり、それぞれの活動で本当にリアルにそういう人と向きあっているというところでは、繋がっていくことでまち全体がボトムアップしていけるような仕組みを、今考えています。

○山田委員長

今、ちょうど次の質問のところも御紹介いただきました。そういう編集会議をすると、改めて情報の質や中身の重要性にお気づきになったということですね。その観点で、既存の茅ヶ崎市の活動をきちんとアーカイブする、整理した情報として保存するということについては、達成度合いですとか、うまくいっているなとか、難しいなといった実感をお持ちでしょうか。

○一般社団法人リトルハブホーム

なかなか思いのある活動がそれぞれあるところで、どう視覚化していくか、とか、どうそれぞれの活動を有効的にとか伝えていくというところでは、私たちも素人なので限界も感じながら次のステップアップなり、ファシリテーターさんみたいのをつけるということも検討しています。来年度は、いったん温めるという状況を作って考えていきたいと思っています。

○山田委員長

市民の熱い思いをそのまま伝えるのはなかなか難しいと思います。ぜひ引き続きご検討いただければと思います。

続いて、いかがでしょうか。

○山口委員

発表ありがとうございます。

最初の目標どおり、いろいろ成果が出ていい活動だったと思います。ボランティアの方が12名から20名に増加ということで人数を増やすことが目的ではなくて、ボランティアが増えたことでリトルハブホームさんの活動そのものがステップアップすることが目標になると思うんですが、そのあたり、活動に寄与したというかボランティアが増えたことによりステップアップした部分があれば教えていただきたいと思います。

○一般社団法人リトルハブホーム

実際、ボランティアさんの声も聞きたいところですが、先にお話をお伝えさせていただくと、今回おっしゃるように人数が増えたこともすごく大事なんです、子どもへの理解だったり、リトルハブホームの「ハブ」って人であり、拠点であり、存在だと思っていて活動に寄与するとか、会を開くとか、場所を開くだけじゃなくて、やはり思いある気持ちというのが一番大事なところと考えていて、実際WEB作成に至るのにいろんな団体さんと繋がったり、コラボのイベントだったりするんですが。今日は繋がる湘南というところでいろんな団体さんと会議を開く予定です。会自体がいろいろ広がっています。あと、今新拠点を紹介していただいたりですね、広まっている中です。

ボランティアさんお願いします。

はい、実際に私が去年から参加しておりますので、私の実感としてまず物理的に回数を増やすことができました。開催の回数ですね、私は土曜日と火曜日、大体週2回ぐらい参加させていただいています。「おむすび寺子屋」「こどもおとな食堂」年間92回開催で土曜日は毎週開催をすることができます。おそらくその前までは隔週ですとか、そういった形だったと思います。

子どもたちが「今日は、やっている」「今日は、やっていない」ということはあまり考えずに土曜日だから行こう。というふうに思える気軽さを作れたのではないかと思います。

それから一回の開催に参加している大人が増えたことでいろんな大人との関わりがそこで生まれている。いろんな背景を持った大人が集まっていますので、子どもの一つの行動に対して首をかしげる人、肯定する人、いろいろいるわけです。子どもたちもそこでいろんな大人がいることを知りますし、受け止めてもらえる安心感というのを得られることに繋が

っているのではないかと思います。

ちなみに今、にじカフェさんにも毎週のように子どもたちを行かせていただいて、それもげんき基金で繋がったりとか、こういう話をさせていただくことで理解を深めて。わわわさんも本当に連れて行きたいところなんですね、土に触れるとか。まるほさんのピザもいいし、この亀とか子どもたちは絶対好き。そういう繋がりにはげんき基金があって広がっているところがあるので、ありがとうございます。

○山口委員

非常によくわかりました。ありがとうございます。

○藤間委員

どうもお疲れ様でした。

会議とか内容とか、みんな見てみたいと思うような勉強になることがあって受けたかったなと思いました。

私も居場所づくりに関わっていてその難しさとか、児童館、公的な機関で入りにくくなっているのを痛感しており伺いことがあります。来る子どもがどうしても常連化するじゃないですか。慣れて、大人もそうだし、子どもも大体顔を見るような子が一緒になってくる中で、新しい子が来にくい環境がどうしても出来てしまう。そこに対してどういうふうな努力をされているのか伺いたいです。

○一般社団法人リトルハブホーム

ありがとうございます。

基本的には新しい子が来たときは、安心する環境を提供するためにコミュニケーションをとったり、ほかの子と一緒にフルーツポンチを作ったり、梅仕事をしたり。あとはボランティアさんがやさしく声掛けしていただいていると思います。そういうところで安心する場所を作っていく。あとは、こども食堂100人集まりました！とかではなく、やはり丁寧に関わりたいのであまり多人数をねらうような活動はしていません。潜在化したニーズに届けていきたいと思って、今後は社協さんとか、サポセンさんにもすごくお世話になっていて、いろいろ繋がりながらやっていきたいと思っています。

○藤間委員

ありがとうございました。

○山田委員長

他に手短に一件くらい、いかがでしょうか。

○船山委員

発表ありがとうございました。

先ほど説明の中で、ボランティアの量と質っていうふうにおっしゃってたんです。この後の両立というか、そういった話をされてらっしゃったんですが、質というのは何をもって担保するものなのかなと思ひまして、教えていただければと思います。

○一般社団法人リトルハブホーム

私が質と申し上げたのはボランティア一人一人の研鑽を積むという意味ですね。知らなかったことを知ることができる。実際、本当に専門家の方がいらっしゃるとぼやっと考えていたようなことが具体的に見えてきたり、全く知らなかった世界を知ったりということがあります。ボランティアをする上でも非常に役に立つことが多かったので、そういう表現をさせていただきました。

質というのも難しいんですけど、知ることで関わりも変わってくると思うし、実際、うちに来ると安心してくそばばあて言うけどくそばばあ背景がなんだとか、家でどういう状況なのかというところを、実際今回里親さんも来ていただいてリアルな声を聞くことで理解を深め、小さなきっかけとしては大事だと思います。

○事務局

では、これで質疑応答を終了させていただきます。

以上で予定しておりましたステップアップの部の2事業が終了いたしました。

次が総括質疑になるんですけれども、ここで5分間の休憩に入らせていただきます。

前の時計で21分から、再開させていただきます。委員の皆様にお知らせいたしますが、コメントにつきましては総括質疑が終了しましたら回収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

では、休憩に入ります。

(休憩)

○事務局

これより再開させていただきます。

それではこれから概ね20分間の総括質疑に移りたいと思います。

総括質疑とは、市民活動のさらなる発展や市民活動げんき基金補助制度の向上などを目的に委員の皆様及び団体、傍聴の方々から日頃の活動の中で感じていることや、忌憚のない御意見などを述べていただくとともに、会場内で意見交換をしていただくものでございます。

また、WEBで御覧になられている皆様につきましてもQ&A機能で御質問をいただければ職員が代読して質問をいたします。

なお質問が多い場合などは時間の都合上すべての御質問を御紹介できないこともありますのであらかじめ御承知ください。

総括質疑の進行は、山田委員長にさせていただきます。

山田委員長、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

皆さん、御報告どうもありがとうございました。お疲れ様でした。

総括質疑は、質疑というよりも連携を皆さんで図っていただく場です。団体の皆さんも、傍聴の皆さんも、私たち委員も、それからWEBで参加をしている皆さんも、同じ茅ヶ崎に関わる市民として、様々な思いを相互に交換できればというふうに思っております。

ということで、まず今日報告をしてくださった方々で、時間の関係で言いたいことが言えなかったですとか、こういうことも伝えなかったということがもしもあれば、先にお話しただいて、すっきりしていただければと思います。

団体の皆さんいかがでしょうか。もしも、何かこんなことを伝えておきたかったっていうところがあれば、はい、どうぞお願いします。

○わわわのわ

質問の機会をありがとうございます。

私も市民活動って呼ばれるものを始めて何年か経つんですけど、実際にどうあるのがいいのかと、いつも模索をしています。

その中でちょっと今日いろいろお話を市の方に聞いてみたいと、あとは市民の皆さん、委員の皆さんはどう考えてらっしゃるのかなと、ちょっと聞いてみたいことが二つありまして。

一つ目が市民活動やるにあたって、基本ボランティアで動く人たちがとても多くて実際に私たちの活動もそうなんですけれども、それを支えてもらわないとやはり続いていけない。その中で行政の方たちに支えてもらいたい部分とか、あとは市民の方たちに知ってもらって支えてもらいたい部分とか、あといくつかあるんですけど。今回、私も仕組みがよくわかってないのですが、国は例えば私たちだったら子どもの居場所の活動をしてまして、子どもの居場所に対して国の税金を私たちの活動におろすという仕組みがあって、今回のげんき基金は、元手は市の方たちのポケットマネーで支えられている。それが私たちの活動の資金になっていて、茅ヶ崎市の税金とか市民から集めたお金をどのように子どもの居場所とか、活動に還元していくという動きがあるのかが私が実はいまいまいちよく見えていないので、どういう方向性があるのかというのを教えていただきたいというのが一つです。

あと今日いろんな方の活動を聞いていて、あと自分たちの活動を進めていて、さっきASOVI VARTさんともちょっとお話をしたんですけど、子どもを相手の市民活動をし

ていてすごくネックになるのが移動手段、交通の便というか、子どもたちが行きたい場所に行くということができない子たちがたくさんいて、例えば私の場合は平日の日中の居場所をやっていますが、きつとこの子は私たちのやっているところに来たらこんなふうにごせるだろうかと、過ごしたいと思っている子もいるんですけれども、平日の日中にそこまでたどり着けないで家にいるしかないという子どもたちがたくさんいる現状で。例えばASOVIVARTさんは海側での活動、私たちは里山での場を開いているけれども、子どもたち自身が行きたいと言ったときに、そこに自由に行けるアクセスがないことで子どもたちの場所がないという現状をこの一年間、場を開いててすごく感じていて、それを解決するのはちょっと市民活動のレベルでは難しいと感じているので先ほどのその、どの部分で茅ヶ崎市として私たちの活動を支えて欲しいかってところで、方向性を聞くのと共に、私たちが今活動して感じているのは交通の便というところを、少し市に動いていただくということが可能なかなというところを、具体的に聞いてみたいと思っています。今、ASOVIVARTさんと話が出たのは、例えばえぼし号を一日に一回でも海から山、山から海とかどこか経由してでも動けるような、どうしても市民病院を経由するようなものが多いみたいなんですけれども。そういう子どもたちの居場所同士を行き来できるような便を、例えばちょっと作っていただくとか、北部でいうとコミュニティバスというのがあって予約制のタクシーみたいなものがあるんですね。それも使い方によっては、ちょっと足を伸ばせるような仕組みがあれば、子どもたちの居場所を転々とできれば、その子たちの体験できること、いられる場所がとも増えると思うので、その2点をお伝えして、この場にいる方たちだけではなくて、もっと市長さんとかに言いたかったんですけど。残念ながらいらっしゃらないので、何か記録に残ったり、何か市として回答いただけるなら市民活動やるものとして、子どもたちの声としてお伝えしたいなと思って長い質問をさせていただきました。

○山田委員長

まず、この会場の役割を整理としておくと、この回答が市からの正式な答えですとはならないので、まずは意見交換の一つとしてお聞きください。

○わわわのわ

そうですね、はい。

可能性をちょっともしこの場で少しでも模索できるならありがたいなというところで。

○山田委員長

では、事務局から、こういう考え方があるよとか、それからこういう方向性にこれからは動くかもしれないといったようなところをまずお話しください。

○わわわのわ

最初から重い質問で申し訳ないんですけど聞けないと残念なので、すみません。時間があるうちに聞いてしまいました。お願いします。

○事務局

なかなかすぐに回答というわけにはいかないのでお話を聞かせていただいたなりに、私なりの感想といいますか、状況の御説明も含めて、させていただけたらと思います。市民自治推進課の小松です。よろしくお願いします。

まず一点目、市民活動をやるにあたってボランティアという形がやはり多くて国であれば今回子育ての関係でおそらく補助金がもらえるのではないかと。市の場合はその寄附金という形をベースにということで。まずげんき基金について、もう御存じな部分もあるとは思いますがけれども御説明をさせていただきますと、この市民活動げんき基金というのが当然市民活動を応援するために、市の一般会計とは別に、そのために積み立てているものでございます。その積み立てている原資となるのが皆さんからの御寄附になっております。その積み立てている御寄附を複数年度使えるように基金という形にさせていただいているんですけれども。私もここにきて難しいなと感じているのが、げんき基金は市民活動の支援のための基金と一言に言うんですけど。とはいえ市民活動はいろんな分野があって何が難しいかというと、それと同じように行政としてもそれぞれの所管課、分野に応じた所管課っていうのがあって、それぞれが補助金を実は持っていたり持っていなかったりします。ですので、私の思うげんき基金としては、まだ特定の分野の補助金であったり、行政からの支援が受けられるように成熟したというか自立した団体に関しては、そういった分野の補助金を取得するような形で動いていただければなと思うんですけれども。ただ、団体が出来てまだ間もないような団体に関しては、なかなかいきなり特定の分野の行政のやっている補助金を確保するのは企画書の作成であったり様々なハードルが高いので、まずはそういった活動にエントリーできるようにげんき基金を通じて当然金銭的な補助も含めて、補助金申請の書き方だったり、実績報告であったり、そういった資金確保に向けて必要なことっていうのを学んでいただくような形で、げんき基金を活用していただければと考えております。

あと二点目、交通の関係なんですけれども、おっしゃる通り北部にはコミュニティバス、空白地帯をなくすためにコミュニティバスを運行していて、特に北部に関しましてはデマンドバスという形で指定の時間帯と場所を予約して運航しているような事例もあります。ただ、どうしても交通事業者という立ち位置で、いろいろ実は市内でもコミバスが通ってないところがたくさんあってですね、そこからさまざまな御意見をいただいているところでもありますし、湘南地区においては地域が様々な主体と繋がって「おでかけワゴン」という地域独自の交通の取組というのをやっている状況ではございますので、まずは、市としてどこまでできるのかというのはいろいろと確認しないとできないのですが。北部から南部、北部の行き来をどう考えているのかという点については所管課の方に確認をしてみます。

お答えとしては、すみません。こんな感じになってしまいます。

○山田委員長

ありがとうございます。

続いて委員会にも御質問が寄せられているので私が代表して。

ポイントだけ御紹介すると、げんき基金を通じて私たち委員会は自治体と協働に繋がるきっかけづくりというのを常に考えて運用しています。だからこれも入り口としては助成金なんですけれども、それによって例えば市民自治推進課と繋がることで、自治体の協力とか関係づくりが必要であればそこから次のネットワークが紹介されていくという意図でやっています。もちろん団体によっては自治体との繋がりを超えて、例えばもっと一般的にある助成団体との繋がりが必要だとか、目的がそれぞれ異なっている場合があるので、市民自治推進課としてもサポセンとしても、そういったところに丁寧に向き合って対応していただくことで協働という形を実現できるようにしています。その入り口をげんき基金として使っただけるといいなという思いで検討し、運用して審査をさせていただいている、というところがポイントです。

二点目の交通についても、これもいろいろな意見があると思います。

多分、御検討いただくといいなと思う点は、移動の可能性が広がると出来ること、これは確かに事実としてはあると思います。けれども、教育の現場に身を置く側の考えとしては、子どもの身体的能力の活動範囲を超える取り組みがその年代のその子どもたちにどのように意味があるのかというのは、やはり一度御検討いただき、その上で御提案くださるとさらに議論が深まるポイントがある、と聞いていて思いました。

例えば、いろんな自治体で検討されている小学校の学区は、確かにそのまちの面積と密度との関係はありますが、平均すると約2キロの半径が設定されています。これは、その年齢の子どもの移動距離とか移動の可能性を前提として設定されています。その範囲の中で、まずはきちんとした関係や日常感を学ぶことも、こうした学区の意味の中にあるとすれば、学区の領域は重要です。よって、学区を前提に、そこから活動領域の広がりや、タイミングや年齢に合わせて徐々に広げていく発想も、その保護者というか、子どもとは別の年齢層の観点からみると要検討事項ではないかと思います。

これが答えということではないんですけど、そういう領域の前提や、年齢に合わせた活動範囲の広がりもあるのではないかなと思います。むしろ、そういう必要性を、こういった場や御提案の中で挙げていただくことで議論が広がり、自治体にも伝わり、私たちもそういうことを考えるようになると思います。いったん今日のところは、次の段階の検討事項として捉えていただけると一番いいのかなと思います。

いずれにしても一石を投じていただくことは大変素晴らしいですし、歓迎できることです。今回のことも含めてそういう連携とか繋がりが広がっていくのが大事なことはないかなと思っています。直球で答えが出るとはならず、とても難しいポイントですが、その辺は引き続き御提案いただけるといいかなと思います。

○わわわのわ

子どもたちの生活を考える上でやはり2キロ、その学区というものが何であるのか、そこに学校があって学童があって、もしかしたらそこにもう少し目を向けることで何かヒントがあるかもしれないなというのは、今すごくそうだなと、どうしてもすべてを経験させてあげなくなってしまうんですけど、今あるものをどうやって生かせるかということもまた同時に考えていきたいと思います。

ありがとうございました。

○山田委員長

これも単なるアイデアなので、それが正解というわけではないんですけど。

○一般社団法人リトルハブホーム

まず市長さんに伝えていただけるといいのかなと思ったのと、あとニーズ、何でこの移動が必要なのかというところを伝えていくために、可視化したり、必要性を伝えるために一団体だけではなく円卓会議ならぬ、子ども支援ネットワークを育んでいろんな皆さん、リアルな声を聞いていると思うのでその辺りで、茅ヶ崎全体で盛り上げていけたらと思います。

市民団体とか活動してる方が継続していくためとか、より有効的な活動になるために坂田さんにお話を聞きたいです。

○坂田委員

難しいですね。

今日の皆さんの発表もそうですし、この間のプレゼンもそうですが、それぞれ素晴らしい活動を展開されていらっしゃると思います。私は平塚の方で団体の活動支援とともに神奈川県の方でもいろいろな活動に携わっているんですけど、団体さんの在りようって一様ではないんですよ。

それぞれの団体さんが目指す未来を自分たち自身がビジョン、ミッションを掲げてそこに到達すべく取り組んでいるということですので、何が何でも連携しなくてはならないというふうには思っていないです。

協働もそうだと思うんですが、こことこの部分では連携したい、協働したほうがいいね。だけど、どうでしょう？どっぷり連携とか協働って結構重たいですよ。なので、その団体の活動の経験とか、それから目的、目指すものに対してちょうどいい連携とか繋がり、緩さとかそういったことが皆さんの中で緩やかに、認知するというか理解ができるとすごくいいなと思っています。

平塚でも子どもネットワークという活動があるのですが、逆にネットワークの活動を強調し過ぎると嫌だという方もいるんです。ネットワークというのも子どもだけではなく福祉の

ネットワークもありますし、高齢者支援のネットワークもあり、市では高齢福祉であれば包括支援センターがあったり、それから地区社協さん、民生委員さん、児童民生委員さん、いろいろな地区の活動もありますよね。その方たちとうまく連携していくというのが市民活動ではすごく重要で、地域の活動と市民活動は横と縦の線ですよ。地域との融合を図っていくためにも、ねばならないとか、これが正しいと言いすぎるとかえって引かれてしまう部分がすごくあるんですよ。ちょうどいい関係を皆さん自身が、実はコーディネーターになって活動していくのが一番いいかな、と思っています。

リトルハブホームさんも、多分中間支援的な動きを目指していると思って今日は拝見しましたので、できればコーディネーターとして、団体の活動を俯瞰して、眺めて、自分たちはどこの立ち位置にいたらいいのか、というところを団体の中で精査していくと、より皆さんに頼りにされる団体になっていくのかなという風に思いました。

こんな回答でいいのかわかりませんが。

○一般社団法人リトルハブホーム

ありがとうございます。

勉強させていただきます。

○山田委員長

どうぞ、お願いします。

○NPO法人ASOVIVART

先ほど説明させていただいた中で、「ことばの森」という場所を作ることになりましたということをお伝えさせていただいたんですが、この場所を作るにあたってこの一過性でないイベントで協力していただいた支援学校の方やまちスポの方や様々な方が、やはり場所が必要だという形でこの「ことばの森」を作ることになったんですね。

この「ことばの森」を作る必要性の中で一番大きいのが子どもの人権だなと私は思っているんです。こうやって大人がたくさん集まって、子どものことについて、また高齢者の方のことについて、お話をしている中で当事者はどう思っているんだろう、当事者がこういうふうに私たちがやろうとしていることを知っているんだろうかというのが、私たちが一番気になるところです。ここに場所ができることによって、皆さんのところに場所ができることによって、そこに行った人は知ることができるかもしれないんですが、もしかしたらそのネットワークがないことによって、一部しか知ることができないかもしれないというのが私の中では一つ懸念点だなと思っています。

その解決方法として、もしこういうことができたらいいなと思うのは、子どもが自分で見つけられるということです。やはり漢字で難しく書いてあって、こんなふうな支援があるんだよというふうに書いてあっても、それは大人が、親が、先生が、教えてくれない限り、見

つけてくれない限り、子どもはSOSを出すこともできないし、新しい世界を見つけることもできないと思うんですね。なので、私はこの「ことばの森」から子ども自身がわわわのわさんだったら、こんなふうに楽しむことができるんだよ、SUPはこんなものなんだよと伝えることをやっていこうと思っているんです。

ですが、もし市が子どものタウンページじゃないですが、こんなふうな「お困り手帳」、小学生や幼稚園の子がわかるような「お困り手帳」のようなものができれば子ども自身が「お母さん、ここにいてみたいよ」だったり「先生こういうのってどう思う？」と言うことができると思うんですね。

なので、一度子どもの人権、子ども目線という形で市の方に、何か検討していただければなと思っております。

○山田委員長

また、御検討いただけますかという問い合わせがありました。お答えできる範囲でリプライをお願いしてもよいでしょうか。

○事務局

ありがとうございます。

こども政策全般に関しましても、市の方で力を入れて確かポータルサイトとかですね、様々な取り組みをやっていると思います。また、そういった紙ベースの冊子というのも確か作っていたと思います。ただ如何せん行政として情報をすべて載せたものを一冊でというと、子ども目線で見にくいかなと思いますので、いただいたお話は担当課の方に伝えさせていただきます。

○NPO法人ASOVIVART

私の方で今お伝えしたいなと思っていたのは、子ども自身が見つかる場所があることが必要だなと思っているんですね。例えば自治体や、まちちからとの協働だったりをすることができれば、そこにある掲示板にはこういうふうな場所があるんだよということを告知することで、子どもが目にして知ることができると思うんですね。すごくミニマムな形で、まずは始めることはできないのかなと思っている感じです。

○山田委員長

御要望として賜りました。

続いていかがでしょうか。

あるいは委員からのリプライはいかがですか。いま時間は、当初の予定を5分ほど過ぎていますが、4時までに終われば問題ないと聞いています。多少延びても構いませんので、御意見等は他にありますか。大丈夫でしょうか。

そうしますと、最後に一言述べて閉会という段階です。委員会としても少し返事をすべきところがありますので、そこは代表して私の方から申し上げられることと、申し上げたいこととお伝えできればと思います。

少なくとも皆さんからの御要望は、「私たちも一年間頑張って活動し、冷や汗を掻きながら今日の報告をしたので、委員も自治体の職員も同じようにちょっと冷や汗を掻いてね」という意味が含まれていたのではないかと思います。すごく切実で、真剣な議論に繋がったという印象です。

当然なんですけど、市民活動なので、正解はないのと同じように、直ちに課題の最適解が見つかることもないでしょう。むしろ、自治体が見えないような問題だからこそ、そう簡単には問いも答えも出ないでしょうし、そこに私たちは向き合っています。そうした活動経験から生じた思いとして、「これは自治体が気付いてください、これは委員会が気付いてください」というふうに今の皆さんのメッセージを受け止めました。

ですから、私もそれに対して明快にこうしますとか、このようにすべきだということがわかりましたと申し上げることが大変難しいです。これについては申し訳なく思いますし、能力不足をお詫びをしなければいけません。「ごめんなさい」というべきところです。他方で、今日の皆さんの御報告も、それから今の総括質疑の御意見も伺って見て、今日のこの会の最大のポイントは社会をつくる学びについてみんなで検討することができたということでしょう。これは、今回の率直な感想です。

つまり、社会づくりやまちづくりは、学び終わった人による完成された形を大切にすることのほかにも、大切なものがある。例えば、学びながら作っていくとか、確認し合いながら形を成していくというような、社会を作っていくために学び、お互いに学び合うところがもっとたくさんあると理解することができ、たくさん教えていただいたなと感じました。このように、御報告をうかがっていました。

その点でいうと、成果や効果を例えば言葉で、例えば形で、例えば写真で、例えば映像で、例えば印象でというふうに教えていただきましたが、こうした御報告の中で言葉がさらに意味として定まってくるという実感も、今日すごく得ることができました。そして、市民活動は、言葉の使い方や言葉の用い方についても示すことができるというか、伝えることができる点に大きな重要性があるなというふうに思いました。だから、ホームページにまとめるとか、冊子にまとめるとか、記録作りはもちろん重要です。それから、活動を通じて集まった感動の声を整理・保存し、その次にむけてきちんと使い、活用し、共有して使い合っていくのも大切なことだと感じました。これは、委員会への宿題というか、与えられたタスクとしてひしひしと感じているところです。

今回の報告書にも、そうした非常に多面的な語りがありました。それを私たちは、実はこの後に評価会議が予定されていますが、その中でまた振り返りつつ、皆さんの活動に対してコメントやこういうところできて素晴らしいというふうに言葉をお返ししていこうと思っています。

これもまた一つのコミュニケーションですし、単なる評価ではなくて、対話として受け止めていただきたと思います。今日解決できないようなところも、その対話が残れば、茅ヶ崎市の大きな財産となります。本来ボキャブラリーという言葉がもっている最大の意味が、そこで確認できるかなと思います。つまり、言葉の問題だけではなくて、言葉をどう使うとか、言葉がどのように使われていくのかといったところに大きな意味があり、これを確認することができました。皆さんの伝えてくださる内容を私たちは受け止め、お答えする。皆さんのさらに広めていく次のボキャブラリーが多くの市民に伝わり、動いていく。また、皆さんの思いが自治体の職員や市長に繋がり、またその中で新たな動きや芽が芽吹いてくる。そうしたところを、今はまだ暫定的なことしか申し上げられませんが、きちんと受け止めて伝え合い、報告し合っていくことができたと感じています。委員会のリプライとして、このように返答します。皆さんもこれを受け止めて御了承いただけるといいかなと思います。

この意味では引き続き、げんき基金の一年間の助成制度が終わったとしても、こういうご縁ですので、事務局とも委員会とも、それからサポセンの方とも他の市民の方とも、うまく繋がりが続けたいただけると一番良いのではないかなと思った次第です。

本当に申し訳ないですが、最適な答えはなかなか見つかりません。それについてはお詫びしかできず、申し訳ないんですが、こういった形で引き続き応答を続けていただければ一番素晴らしいことじゃないかなと感じました。これを暫定的な委員会からの返事というふうにさせていただければと思っております。

本当にまとまりがないところで申し訳ありません。この総括に対する最後の一言と、それから一応、最後に委員長から一言述べてくださいという挨拶の時間もあるのですが、時間が迫っているのでこのコメントでまとめさせていただければと思います。

WEB上からの質問は出てないですか。

他にも傍聴の方からも何か、残り時間が5分を切りましたけれども、もしあれば、よろしいですか。

○NPO法人ASOVIVART

先ほどお話していた中で、たくさんの思いを持っていらっしゃる方、ものを、皆さんに伝えるきっかけが本を通じてできないかと思ってこの場所を作っています。なので、この「ことばの森」というのは6月の半ばにプレオープンする予定ですので、もし皆さんの御自宅に子どもたちに伝えたい一冊というのがありましたら、エピソードと一緒に御寄附いただきますと嬉しいです。どうぞ、よろしくお願いいたします。

○山田委員長

ということで、では時間となりましたので委員長の最後の挨拶も含めて、以上とさせていただきます。

皆さん御協力、それから御報告、御参加どうもありがとうございました。

○事務局

山田委員長ありがとうございました。

皆様も1時から4時前まで、どうもお疲れ様でした。

それでは以上を持ちまして、令和6年度実施市民活動推進補助事業実施報告会を終了させていただきます。

ありがとうございます。